

# 令和幕開け、レディ! One 熊谷

## 熊谷レディたちの活躍

「令和熊谷」の始まりは2019年5月。新緑の季節は、新時代のスタートにふさわしい。NAOZANE編集部では、ラグビーワールドカップも開催されるメモリアルイヤー、R.1熊谷を「レディ! One熊谷」とすることを提案。最近の熊谷レディたちの活躍をみていこう!



イベントは不定期開催。市報4月号「夢追い人」でも活動が紹介された



ボランティアの調理室。多様な「なないろ」の人々が、「達成感」を味わいたくして集まる

務める杉田しげみさんが熊谷から56年ぶりの女性県議になったのははじめ、市議選では合併以来初の女性トップ当選のこしづかなほさん(立憲民主党)ら計6名が議会入りしている。

「情報社会でも、人は人との繋がりを求めているのではないのでしょうか。そんな人との出会いの場をつくるのが夢です」(「二十一夜」青山延子さん)

実家の蔵を改装したコミュニティスペースは、ママ友らとの付き合いから生まれた。

作り手ではないからこそ発信の場ができる。とヒントをもらい、一

発奮起で眠っていた蔵を整備。敷地内の如意輪観音像にちなむ、月待ち講「二十一夜様」の復活をめざす。

「主婦やママの力が、調理ボランティアで大活躍です。たくさんのお子もたちに喜んでもらえるし、仲間もできて、疲れも達成感がある。これまでは家族のためだけだった食事づくりが、地域の方々のために変わるんですね」(NPO・SK人権ネットワーク代表・「熊谷なないろ食堂」を運営する山口純子さん)

現在、市内に3つある子ども食堂。「貧困」をテーマに全国で始まったが、実際は「みんなで食事する楽しさ」が多くの参加者を集めている。手話教室や学習支援をメニューに加える「熊谷なないろ食堂」は、現在1回の参加者100名以上。食へに来る子どもたちの喜びが、ボランティアの達成感につながって継続されている。

「こんな多くのみなさんが歌ってくれて



ウルグアイ国歌練習。「三科さんみたいな(熊谷ファン)の存在は心強いです」(合唱団長の白杵さん)

「ラグビーワールドカップを控えてさまざまな動きが交差する熊谷。熊谷会場3か国代表の国歌を歌うことで応援する「熊谷ラグビー合唱団」は、発想のユニークさでメディア露出も多い。

「国歌」の部分だけが独り立ちし、息子さんの母校・熊谷高校の音楽部に協力依頼して収録したジョージア国歌のYou Tube動画は再生2万回超、さらに「ラグビーロードチャレンジャー」など主宰ウズキングベール・白杵健さんの呼びかけで大きな歌声の渦が生まれている。

「わたしは合併しての『熊谷市民』でも息子は熊谷で生まれ、大人になってもここに住みたいという。一人息子に何が残せるかなと思った時、安全で楽しく生活できる熊谷というまち、わたしの知人や友人とのつながりだと思って発信し始めました」(FMクマガヤパーソナリティ・吉田香さん)

本稿最初で山田監督インタビューを電波に乗せた4月開局のFMクマガヤ。「ラジオで話す人になったスターティングメンバー23人のうち12人が女性だ。農業や食の分野を中心に活動してきた吉田さんは、昨年発行の「Design」トラベルワークシヨップに参加して世界が広がった。FM開局に際してDJとパーソナリティの違いもわからなかった放送の世界に飛び込み、2か月の研修では自分の内面と向き合えたという。

「R1」直前。熊谷レディたちは、それぞれの夢を新たな時代に描いている。

本作は監督が、「うまい! 今までみてきたなかでいちばん」という若村麻由美さん主演で製作は順調。秋に公開予定だ。



ディーエムクリニック 新井敏子さん(上) 全身の脂肪量・筋量が測定できるDXA装置(下)

「医学問題で明治時代、封建時代と同じようなこと、男性を入れて女性を落とすなんてそんなひどいことが行われていることにすごく腹が立ちました。わたしは昭和生まれの女性は悲しいことに、戦争に負けて初めて女性解放運動ができたわけです。ひどい明治の時代に荻野さんは、売春禁止やお酒の害を訴えてものすごい勢いで戦った。もっと日本の女性たちが、化粧をベタベタするんじゃなく、知性で男性と五分に生きていってほしいですね」(山田火砂子監督)

4月15日、聖天山お開帳前日で沸く妻沼。井田記念館で映画『一粒の麦 荻野吟子の生涯』ロケ中、昭和7年生まれ的女性監督が、急遽のFMクマガヤの取材で電波に乗せたメッセージだ。



インタビュー時の山田監督(提供:FMクマガヤ)



提供:現代ぶろだくしよん

「妊娠・出産で家庭に入ると、健診を自分で申し込まなければならなくなるから機会が減る。女性の健康の問題は、社会的な部分が強いです。何ともないからと健診に行かないで、気づいた時にはもう遅いということがあるように、検診受診率を上げたいですね」(ディーエムクリニック・診療放射線技師・日本乳癌検診学会・評議員 新井敏子さん)

日本の女医第1号を産んだ熊谷でこの秋、女性の医療・健康サポートの新たなシステムが誕生する。三ヶ尻のディーエムクリニックが、女性職員のワーキンググループを立ち上げて設定した毎月第2水曜・女性限定の「レディースデイ」や、ドッグ一式を加えた「プリンセスコース」などを新設した(今秋開始。詳しくはP6)。

栄養指導やハンドマッサージもプラス。医師・スタッフとも女性で開発し、受診しやすい雰囲気をつくる。



多くの女性の支持を受けての選挙活動だった

「今回はとくに女性議員の必要性が問われた選挙だったと感じました。妊娠、出産、育児、介護、また、仕事との両立など女性が抱える課題を解決していくことで、男性も住みやすい町になると確信しています」(熊谷市議・中島ちひろさん)

女性の健康づくり、乳がん検診の普及などに努めてきた「くまがやピンクリボンの会」。同会でも活動する中島ちひろさんは、4月の市議選に初立候補で当選した。女性候補大躍進だった今回の統一地方選。無投票とはいえず、まがや共同参画を進める会会長を



ミキサー操作をする吉田さん(一番手前)。4月24日の夕方のアズ6階「スキルプラザスタジオ」は女性3人の配置だった

世界的には「#Me Too」ムーブメントが起こり、2030年までにすべての国が取り組むべきとされる17のゴール「SDGs」でも「ジェンダー主流化」は基本原則だ。でも、大文字のターゲットや借りものことばを掲げただけでは何も起きはしない。その土地で同じ空気を吸って生きる一人ひとりが、たがいを認め合いながら自分ができることをする。今回答ができた女性たちが、いずれも「one is all」のために行動していることは、ひとつのヒントになるだろう。山田監督や三科さんのように、ここでなければできないことをしに来る人にはとくにやさしくありたい。

新元号の頭文字「R」は、「Realize」「実現化」のR。平成はその「Ready」「準備」の期間だったかも知れない。

熊谷にきつと、「いい時代」がやって来る。

【取材文 小林真こばやし】